

高畠町遺跡(I)

—— 県営西宮北口（2期）住宅建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 ——

1999年3月

兵 庫 県 教 育 委 員 会

高畠町遺跡(I)

—— 県営西宮北口（2期）住宅建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 ——

1999年3月

兵庫県教育委員会

例　　言

1. 本報告書は、兵庫県西宮市高畠町20-12に所在する高畠町遺跡（I）の発掘調査報告書である。
2. 「高畠町遺跡（I）」は県営西宮北口（2期）住宅建設事業に伴い、兵庫県阪神・淡路大震災復興本部都市住宅部から依頼を受けて発掘調査を行ったもので、阪神・淡路大震災の復興調査として位置づけられている。
3. 調査は平成7年7月10日から7月14日にかけての5日間で行った。
4. 調査の担当は森　正（京都府教育委員会からの支援職員）、中村　弘の2名が行った。
5. 遺跡調査番号は950153である。
6. 遺物の接合・補強・図化・復元・写真撮影は兵庫県教育委員会埋蔵文化財事務所（兵庫県神戸市兵庫区荒田町）において行った。
7. 発掘調査現場での写真撮影は調査員が行い、遺物整理後の遺物写真撮影は（株）衣川に委託して行った。
8. 第4図周辺の遺跡には国土地理院発行の2万5千分の1図「西宮」「大阪西北部」「宝塚」「伊丹」を使用し、第3図遺跡周辺地形図は明治18年発行の2万分の1図「西宮町」「今津村」を使用した。また、写真図版1には日本地図センター発行（著作権者は国土地理院）の航空写真を使用した。
9. 第2章で使用した参考文献は以下のとおりである。

〔参考文献〕 角川日本地名大辞典 28. 兵庫県 1988年 竹内理三編
西宮市埋蔵文化財遺跡分布地図及び地名表 1997年 西宮市教育委員会
10. 遺物・実測図・写真などの資料は、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所において保管・管理している。
11. 本書の編集・執筆は中村　弘が行った。



第1図　遺跡の位置

目 次

本文目次

第1章 調査の経過

第1節 調査に至る経緯と経過	1
第2節 調査・整理の体制	1

第2章 遺跡の位置と環境

3

第3章 調査の結果

第1節 遺跡の概要	6
第2節 土 層	6
第3節 遺 構	
(1)概 要	8
(2)土器溜まり	8
(3)杭	8
第4節 遺 物	
(1)上層出土遺物	9
(2)中層出土遺物	11
(3)下層出土遺物	13
第4章 まとめ	16

挿図目次

- 第1図 西宮市位置図 (例言)
第2図 調査区位置図 (P 2)
第3図 遺跡周辺地形図 (P 3)
第4図 周辺の遺跡 (P 4)
第5図 標準土層図 (P 6)
第6図 調査区平面図・土層断面図 ... (P 7)
第7図 杭出土状況 (P 8)
第8図 上層出土遺物 (P 10)
第9図 中層出土遺物 (P 11)
第10図 下層出土遺物 (P 12)
- 表1 周辺遺跡地名表 (P 5)
表2 土器一覧表1 (P 14)
表3 土器一覧表2 (P 15)

表目次

写真目次

写真図版目次

写真図版 1 遺跡

- 遺跡の環境 (1949年撮影)
写真図版 2 遺跡
1. 調査区遠景 (南西から)
2. 調査前 (西から)

写真図版 3 調査区

1. 調査区全景 (東から)
2. 調査区全景 (南から)

写真図版 4 土層

1. 基本層序 (西壁北側)
2. 基本層序 (西壁南側)

写真図版 5 遺物出土状況

1. 落ち込み内遺物出土状況 (南から)
2. 落ち込み内遺物出土状況 (北から)

写真図版 6 杭

1. 杭1 断ち割り状況 (南東から)
2. 杭2 断ち割り状況 (西から)
3. 杭3 断ち割り状況 (南西から)

写真図版 7 遺物(1) 上層出土遺物

写真図版 8 遺物(2) 中層出土遺物

写真図版 9 遺物(3) 下層出土遺物

写真図版10 遺物(4)

第1章 調査の経過

第1節 調査に至る経緯と経過

平成5年10月19日に都市住宅部住宅建設課あてに開発計画の実態に関して照会を行ったところ、平成5年11月15日に回答があった。その中に、今回の発掘調査の契機となった西宮北口団地（2期）が含まれていた。

ところが、平成7年1月17日に突如として起こった阪神・淡路大震災により、当事業が復興事業として位置づけられた。復興事業については、ライフラインの復旧や仮設住宅の建設など当面の緊急を要する工事について、5月末日までは文化財保護法による届出を要しないという通知（平成7年2月23日付府保記第144号）がなされ、さらに、同じく文化庁通知である「阪神・淡路大震災の復旧・復興事業に伴う埋蔵文化財の取扱いに関する基本方針について」（平成7年3月29日付府保記第144号、文化庁次長通知）に沿って取扱いすることとなり、当事業もこれに含まれることとなった。

このような中で、平成7年6月27日、および7月3日に現地検認を行ったところ（第2図の黒色部分）、建設事業がすでに進行しており、杭打ち、現地表面から2mの深さまでの1次掘削、シートパイルの打ち込みなどの工事が終了していた。しかし、事業により掘削される範囲の南西部分において遺物を含む層が残存していることを確認したため、事業計画と調整の上、平成7年7月5日に兵庫県阪神・淡路大震災復興本部都市住宅部から全面調査の依頼を受けて調査を実施した（第2図の網目部分）。

全面調査は、調査期間が平成7年7月10日から7月14日までの5日間で、面積は約300m²である。

第2節 発掘調査・遺物整理の体制

発掘調査、遺物整理作業については、以下の体制で行った。

発掘調査（平成7年度）

調査主体 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

所長 青木正之

調査担当 復興調査班

班長 山本三郎

支援職員 森 正（京都府教育委員会からの支援職員）

技術職員 中村 弘

遺物整理（平成10年度）

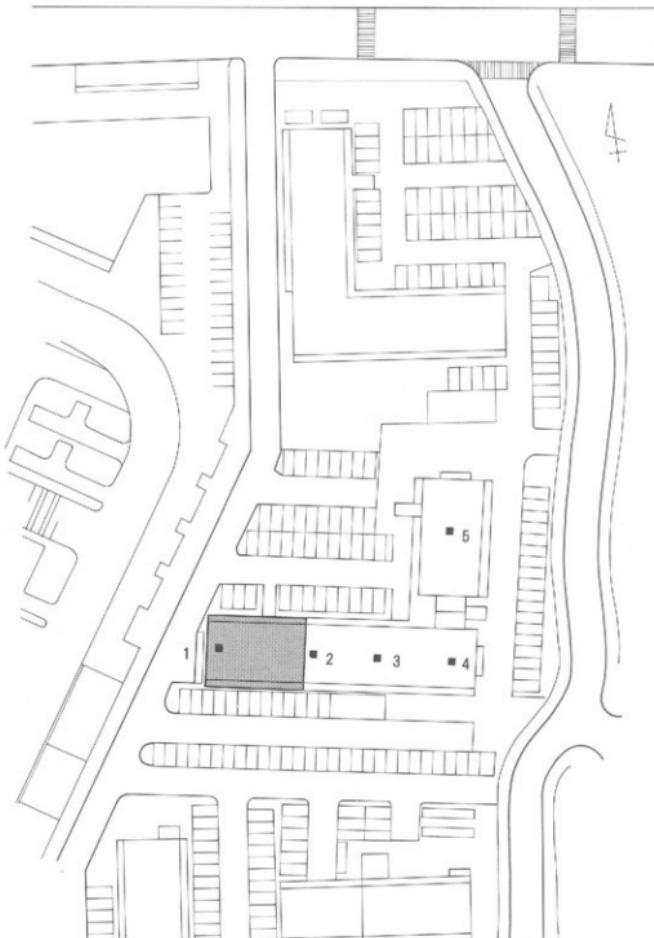
調査主体 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

所長 寺内幸治

整理普及班 班長 岡崎正雄

主査 村上賢治

嘱託職員 前山三枝子、藏 畏子、大仁克子、小寺恵美子



調査区



現地検認地点

第2図 調査区位置図

第2章 遺跡の位置と環境

高畠町遺跡は、兵庫県西宮市高畠町20-12に位置する。摂津地域に属するが、その中でも西侧の西摂地域にあたる。遺跡の位置する西宮市は南は大阪湾、北は神戸市北区、東は武庫川を隔てて尼崎市・伊丹市、西は芦屋市と接している。南部は武庫平野の西部、中央から北部にかけては六甲山地の東部にあたり、標高400~500mの秀ヶ辻山・畑山が横たわる。北部を名塩川が東流、有馬川が北流し、武庫川が南部の東境を南流する。高畠町はこの西宮市の南側に位置する。

高畠町は昭和25年からの町名で、もとは西宮市津門・今津の一部であった。津門は津戸とも書かれ、港の入口の意味からくるとされている。「津門郷」という名は平安期の和名抄に摂津國武庫郡八郷の一つとして見られる。日本書紀神功皇后攝政元年2月条や応神31年8月条に見える「務古水門」「武門水門」を当地にあてる説もある。これに対し今津は、津門が古い港であったのに対して新しく開けた港という意味からくるとされる。

当遺跡は、武庫川下流の西岸にある。武庫川は豊富な土砂を供給する川で、古くから洪水が多く、現在も天井川となり、川の周囲は自然堤防状に高くなっている。高畠町遺跡の周囲はこの高まりの西側で、相対的に谷地形となっており、かつては遺跡の北側に溜池である深津池が存在していた。

次に当遺跡周辺における歴史的環境であるが、現在のところ旧石器時代の遺物は知られていない。縄文時代の遺物については上ヶ原台地などで採集品があるものの遺構に伴う状態では確認されていない。

弥生時代になると、平野に接する丘陵縁辺部、あるいは仁川五ヶ山遺跡のような高地性集落が丘陵上にみられるようになる。一方、沖積地である当遺跡周辺では良好な状態で遺跡が確認されておらず、散布地として知られるのが多数である。その中で、越水遺跡からは多数の漁労用土錐が幅広い時期にわたって出土しており、このころには近海まで入海であったことを証明している。また、津門東芝遺跡からは銅鐸が出土している。

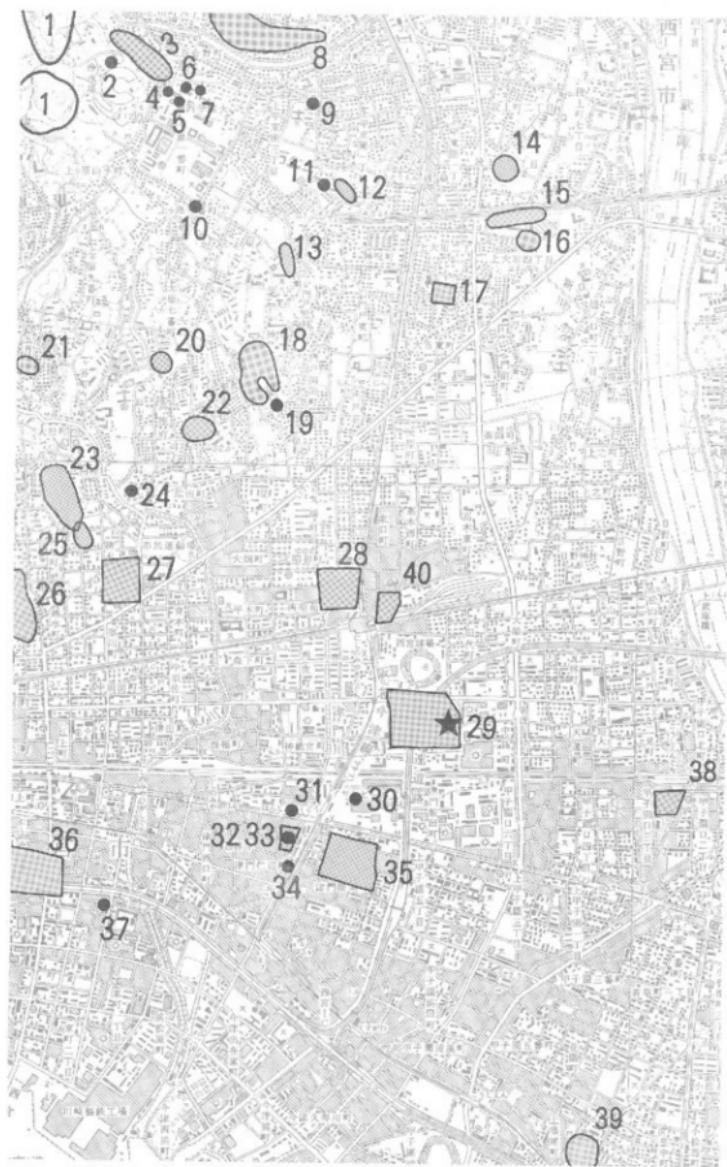
古墳時代には、中期から後期の津門稲荷山古墳、大塚山古墳の2基が比較的海に近いところに築造される。いずれも前方後円墳と考えられている。後期になると六甲山南麓に場所が移り、群集墳が築造された。

古代には武庫水門として繁栄したと考えられ、中世には実態は不明であるものの井部莊が今津・津門付近にあったとされている。

このように重要な地域ではあるものの、都市化が早く、考古学的資料として知られるものは少ない。



第3図 遺跡周辺地形図



第4図 周辺の遺跡

表1 周辺遺跡地名表

番号	遺跡名	種別	時代
1	徳川大坂城東六甲採石場	散布地	近世
2	上ヶ原淨水場古墳	古墳	古墳
3	上ヶ原新田墓地遺跡	散布地	弥生
4	関西学院構内古墳	古墳	古墳
5	神呪池	古墳	古墳
6	上ヶ原古墳	古墳	古墳
7	上ヶ原古墳	古墳	古墳
8	仁川高台遺跡	集落跡	弥生
9	入組野古墳	古墳	古墳
10	車塚古墳	古墳	古墳
11	天神裏古墳	古墳	古墳
12	甲東園天神社遺跡	散布地	弥生
13	上ヶ原No.2遺跡	散布地	古墳
14	段上遺跡	散布地	古墳
15	大市No.2遺跡	散布地	弥生・古墳・中世
16	大市No.2遺跡	散布地	弥生・古墳・中世
17	大市No.1遺跡	散布地	古墳
18	岡田山遺跡	散布地	弥生
19	神戸女学院構内古墳	古墳	古墳
20	上ヶ原No.1遺跡	散布地	古墳
21	六軒山遺跡	散布地	弥生
22	愛宕山遺跡	散布地	古墳
23	広田遺跡No.1地点	散布地	古墳
24	具足塚	古墳	古墳
25	広田遺跡No.2地点	散布地	古墳
26	越水山遺跡・越水遺跡	集落跡・城館跡	弥生・古墳・中世
27	広田遺跡No.3地点	散布地	繩文
28	甲風瀬遺跡	散布地	弥生・中世
29	高畠町遺跡	集落跡	弥生・古墳・中世
30	大塚山古墳	古墳	古墳
31	津門東芝遺跡	単独出土地	弥生
32	津門鶴荷山古墳	古墳	古墳
33	津門鶴荷町遺跡	散布地	弥生・古墳
34	津門鶴荷町9遺跡	散布地	古墳
35	津門大窓町遺跡	散布地	古墳・中世
36	西宮神社社頭遺跡	散布地	弥生・古墳・中世
37	石在町銅錢出土地	単独出土地	中世
38	甲子園口遺跡	散布地	弥生・古墳
39	上鳴尾遺跡	散布地	平安
40	西宮北口遺跡	集落	弥生～中世

第3章 調査の結果

第1節 調査の概要

調査は、現地表面から350cmが開発事業により削平されていたため、そこから下層についてのみ行った。調査の結果、弥生時代後期から古墳時代中期にかけて存在した微高地の北端が確認され、土器満まり、杭列が検出された。遺物は、28ℓ入りのコンテナで10箱出土し、弥生土器と土師器が大半を占める。



写真1 調査状況

第2節 土層

基本層序は第5図のとおりである。調査地には大規模に盛土が行われており、約2mの厚さを測る。盛土にはビニール袋などの近・現代のものが含まれている。盛土の下層は、暗灰色シルト層、暗灰色細砂が認められた。その下層には明黄褐色の粘質土が堆積している。この層は、他の層と比較して明るく、かつ粒子が細かく粘性を帯びている点で特徴的である。さらに下層は礫混じりの暗灰色細砂が認められ、古墳時代後期の須恵器が多く出土した。この層の下には青灰色細砂が堆積しており、間には部分的に黒色シルトが認められる。この層から弥生時代後期の土器がまとまって出土している。さらに下層には暗灰色細砂が認められる。

これらの土層堆積は、基本的に調査区外の現地検査地点でも同様であるが、盛土が約1m前後で薄く、その分それ以下の土層の絶対高が高くなっている。

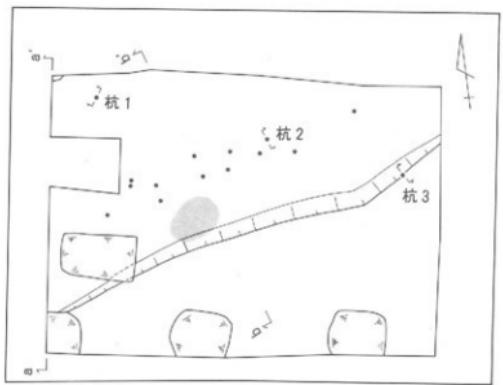
さて、調査区内での土層の堆積状況であるが、調査が開始された時にはすでに上側（第5図の1層～9層まで）が工事により削平されており、下側の層のみの調査となつた。調査区の南側には調査範囲での最下層である灰褐色細砂～粗砂が認められ、微高地を形成する層の一部となっている。この層の堆積は西南西から東北東の方向に向かって堆積しており、調査区は、この層が低くなる場所、すなわち微高地から湿地へと変わるところにあたる。これより上の層は微高地から低いところに流れ込むような状況で堆積している。

微高地から低地にかけて堆積している層は、主に上層、中層、下層の3層に分けられる。上層は黒灰色～中礫混じりシルト質極細砂、灰白色細砂からなり、古墳時代後期の土器を包含する。中層は暗灰色シルト、暗灰色シルト質極細砂～シルトからなり、古墳時代前期から中期の土器を包含する。下層は灰色シルト質細砂、青灰色シルトからなり、弥生時代後期の土器を包含する。

この層より下層からは遺物の包含は確認できなかった。



第5図 標準土層図



- | | |
|---------------------|----|
| 1 明黄褐色 極細砂 | 上層 |
| 2 暗灰色 小～中疊混シルト質極細砂 | |
| 3 黒灰色 極細砂質シルト（炭若干混） | |
| 4 灰白色 細砂 | |
| 5 暗灰色 シルト（有機質多く含む） | |
| 6 暗灰色 シルト質極細砂～シルト | |
| 7 灰色 シルト質極細砂 | |
| 8 青灰色 シルト | |
| 9 灰褐色 粗砂～細砂（微高地ベース） | |

0 2 m

調査区 断面図

第6図 調査区平面図・土層断面図

第3節 遺構

(1)概要

調査区の北東から南西にかけて、自然地形の落ち込みが検出された。落ち込みについては人為的なものではなく、微高地から低湿地へと低くなっているもので、自然の地形によるものである。両側が微高地で、北側が低湿地である。遺構は低湿地において認められた土器溜まりと、杭が15本検出された。

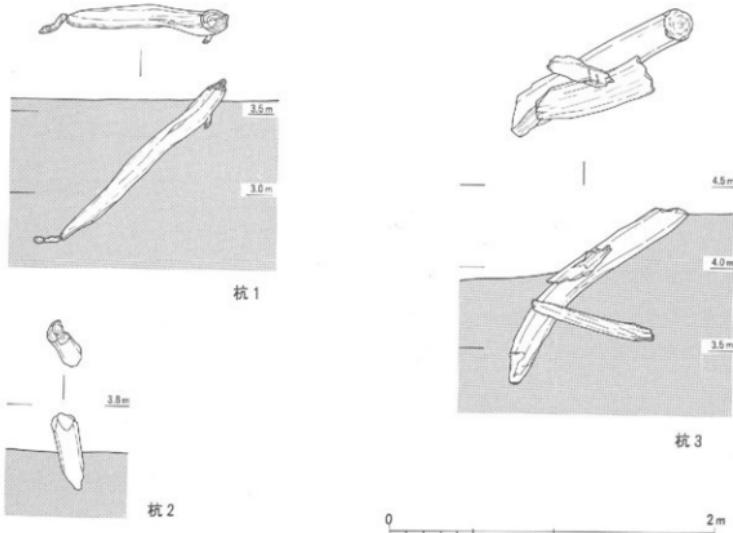
(2)土器溜まり（第6図の網部分、写真図版5）

落ち込みの南側、微高地から低湿地へと落ち込む際において認められた。落ち込み内からは全体に遺物が出土しているが、特に調査区中央付近において集中する部分があった（第6図の網部分）。遺物は弥生土器が中心で、完形に近い個体も認められるが、ほとんどは10cm程度の破片である。

(3)杭（第7図、写真図版6）

低湿地内で、微高地に近いところで、微高地に沿って15本が検出された。いずれも掘方などではなく、また、先端を尖らせていることから、低湿地に打ち込まれた杭であるとわかる。杭には直径3～5cm、長さ30cm程度の細い小型の杭と、直径14～20cm、長さ60～150cmの太く、長い大型の杭の大きく2種が認められ、前者が12本、後者が3本検出された。

細い杭は微高地に沿って2列が平行するように打ち込まれており各杭の間隔は平均80cm程度である。一方、大型の杭については、微高地の際から、低湿地の内側にかけて3本がほぼ直線上に7m間隔で並



第7図 杭出土状況

んでいる。杭2は垂直に近い方向に打ち込まれているが、杭1は北側へ、杭2は南側へ大きく傾いている。

細い杭については、水田の畦畔に打ち込まれたものである可能性もあるが、太い杭については、性格は不明である。また、時期についても明らかにし難いが、弥生時代後期の土器のみからなる落ち込み下層の上から打ち込まれていると考えられることから、弥生時代後期より新しいことがわかる。

以下、大型の杭1～3についてのみ詳細を記す。

杭1 長さ140cm、直径14cmを測る。検出面から90cmまで地中に打ち込まれていた。先端を2方向から加工し、尖らせている。樹皮がついたままである。杭が打ち込まれた先端付近には他の木材が認められ、長さ20cm、直径6cmを測るが、杭1と関連するものかどうかは不明である。

杭2 長さ60cm、直径15cmを測る。検出面から30cmまで地中に打ち込まれていた。先端を1方向から加工し、尖らせている。

杭3 長さ150cm、直径20cmを測る。検出面から120cmまで地中に打ち込まれていた。先端を3方向から加工し、尖らせている。付近には他の木材2片が認められ、長さ75cm、幅25cmの辺材と、長さ50cm、幅18cmの辺材である。いずれも近接して出土していることから、関連するものと考えられるが、その用途、目的は不明である。

第4節 遺物

今回の調査によって出土した遺物は、28ℓ入りのコンテナに10箱である。ほとんどが弥生土器と土師器であるが、須恵器や縄文土器も出土している。

出土場所はいずれも落ち込みの中で、上層、中層、下層の3つにわけることができる。

なお、土器の種類は大きく縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器と分類するが、明確に弥生土器と土師器にわけることができないものがあるため、ここでは両者を含める概念として、土師質土器という言葉で表現している。

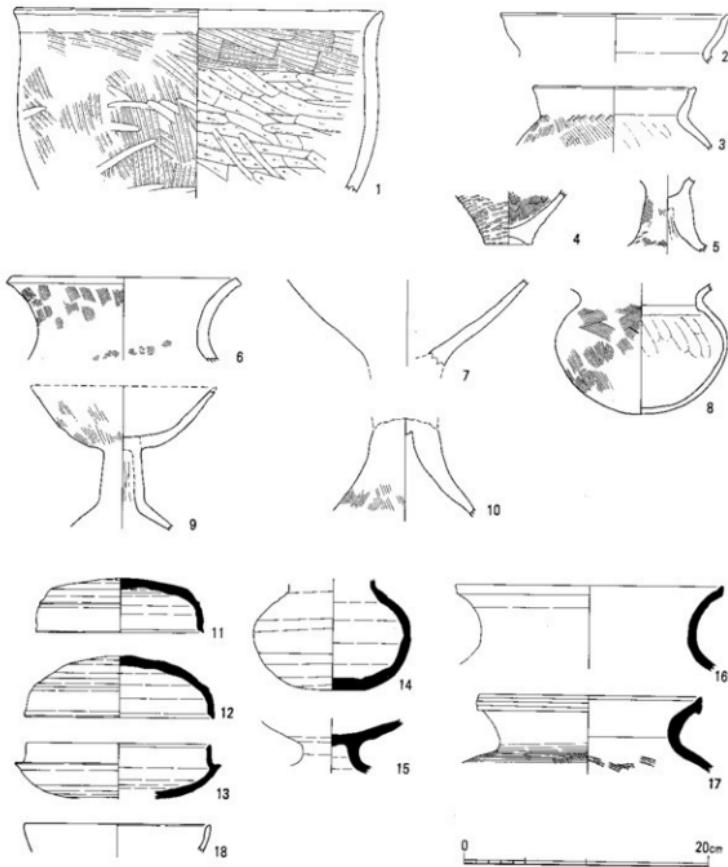
(1)上層出土遺物

上層からは、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器が出土している。須恵器は、この層のみから出土しており、これ以下の層と明確にわかっている。

1は縄文土器で、外面および内面の口縁部は2枚貝条痕が外面に認められ、外面は部分的にナテ消している。内面部は横方向のケズリが認められる。

2～10は土師質土器である。2は土師器壺である。若干内側する口縁部で、端部は斜めを上方に面をもつ。調整は確認できない。3は土師器壺である。短く直線的な口縁で、端部は平らである。体部外面は左上がりのハケ目、内面にはケズリの痕跡が認められる。4は弥生土器の壺の底部である。若干窪んだ底部をもち、体部外面はやや右上がりのタタキ、内面は左上がりのハケ目で成形、調整されている。

5は製塙土器の体部から脚部の破片とも考えられる。体部の底は大きく窪んでいる。脚部外面にはタタキが観察され、内面にはシボリの痕跡が認められる。体部外面は縦方向のハケ目が観察される。6は壺の口縁である。ゆるやかに外反し、端部は平らである。外面には縦方向のハケ目が認められる。体部内面には横方向のハケ目が確認できる。7は壺の底部と考えられる。調整は磨滅のため観察できない。8は丸底の壺である。やや偏平な体部をもち、外面下半は縦方向、上半は横方向のハケ目、内面は縦方向

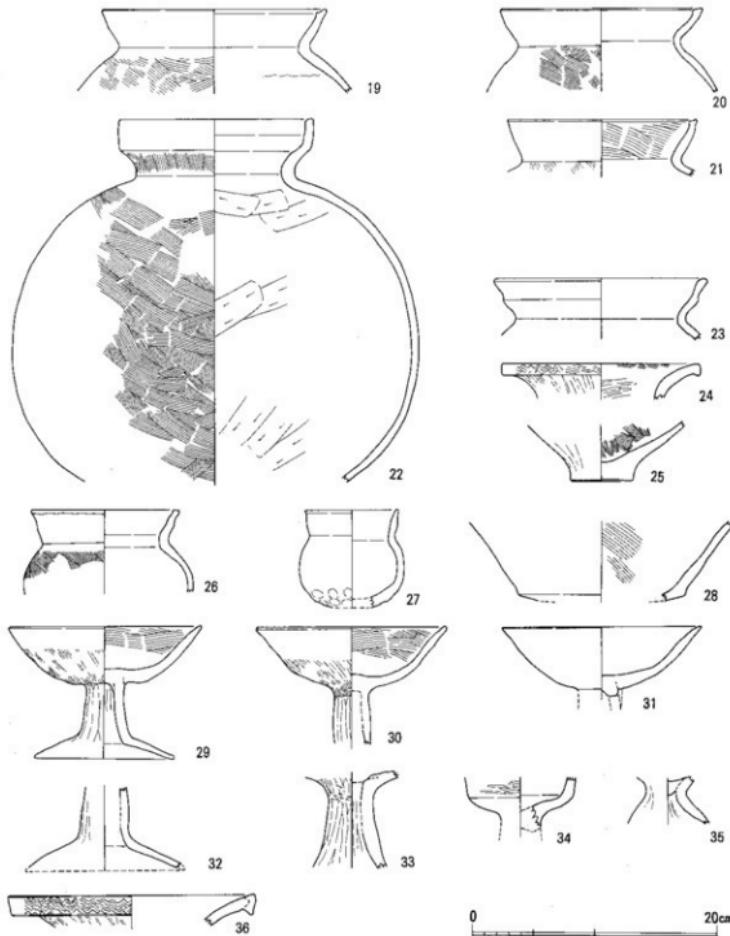


第8図 上層出土遺物

のナデにより調整されている。9は土師器高环である。脚部に环部を付加することにより製作されている。10は脚部片である。やや大型の脚で、外面にハケ目が観察できる。

11～17は須恵器である。11は环蓋で、体部と口縁部の境に稜が認められる。12も环蓋であるが、稜はほとんど認められない。13は环身である。浅い体部に上方へのびるたちあがりをもつ。14は壺、15は短脚の高环である。16・17は壺の口縁部である。17は体部外面に縱方向の平行タタキの後、横方向のカキ目が認められる。

18は土師器环で、内面には内傾する面をもつ。内外面ともに橙色を呈す。

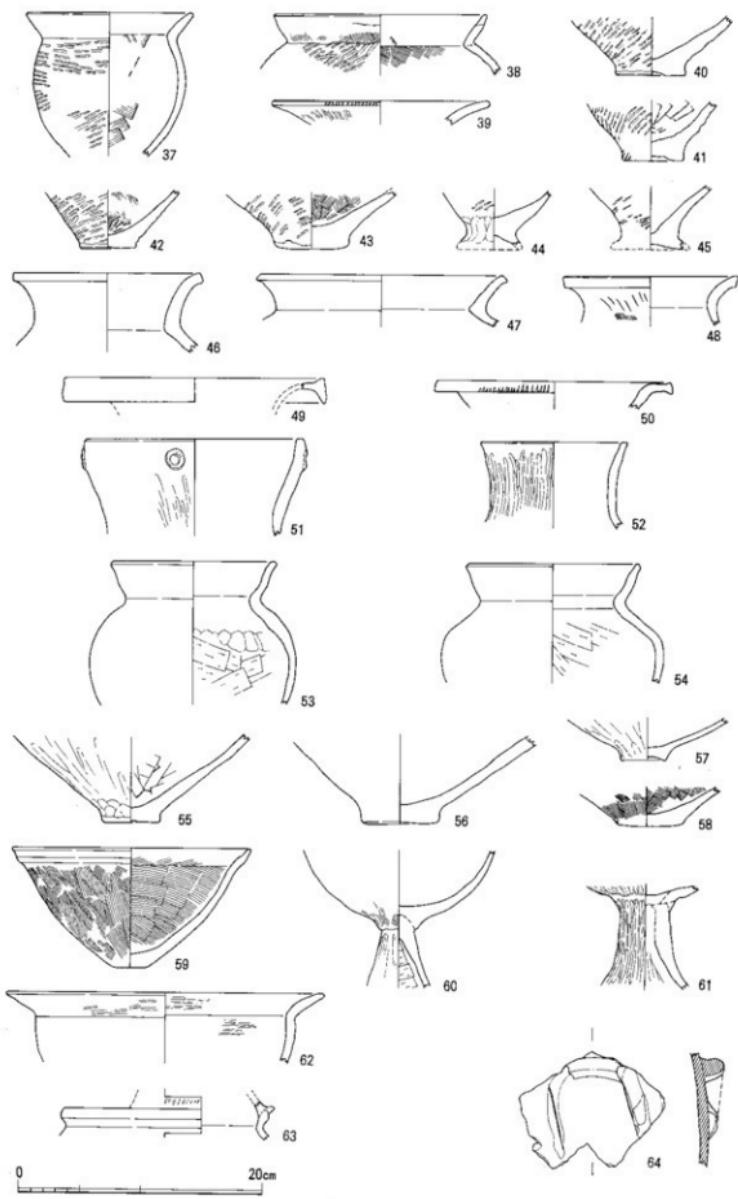


第9図 中層出土遺物

(2)中層出土遺物

中層からは弥生土器、土師器が出土した。全体に土師器の比率が高く、下層が弥生土器を中心としているのと比べて対照的である。

19～21は土師器の縁である。いずれも体部外面は左上がりのハケ目で、内側する口縁部をもち、端部を肥厚させる。21は口縁部内面に左上がりのハケ目が確認できる。



第10図 下層出土遺物

22～27は壺である。22・23は二重口縁の壺である。24は広口壺の口縁部で、外方に面をもち、端部には鋸歯文が巡る。外面には縦方向のヘラミガキが認められる。25は壺の底部片、26・27は小型の丸底壺である。

28～35は高壺である。28は大型の高壺で、口縁部が直線的に長く大きく開く。内面には斜め方向のハケ目が認められる。29～31は体部から口縁にかけて明確に稜をもたず聞く。確認できるものは壺部外側が縦方向のハケ目、内面が横方向のハケ目、脚部が縦方向のヘラミガキである。32は脚部で、29と同様に壺部で屈曲して開く。33は脚部で、円盤充填により製作されたと考えられ、外面は縦方向のヘラミガキ、内面はシボリの痕跡が確認できる。34は上方へ屈曲する体部をもつ。外面は丁寧な横方向のヘラミガキが認められる。35は円盤充填により製作された小型の高壺である。

36は器台である。口縁部端部は外側に向く面をもち、波状文が巡る。

(3)下層出土遺物

土師器がはじまるものの、弥生土器の占める割合が大きい。

37～43は弥生土器の壺である。37は小型の壺で、体部下半が右上がりのタタキ、上半が左上がりのタタキ、内面はハケ目により成形、調整されている。38は体部外側に右上がりのタタキが確認でき、口縁部には縦方向のハケ目が認められる。39は口縁端部に刻目が施される。40～45は底部片である。いずれも外面には右上がりのタタキが認められ、内面には確認できるもの全てに左上がりのハケ目が認められる。40は底に木の葉の圧痕が認められる。44は低脚をもち、外面には縦方向のナテが認められる。製塙土器とも考えられる。45は外側に踏ん張る底部をもつ。

46～58は壺である。51は茶褐色を呈し、口縁部外面に竹管文円形浮文を巡らす。52は直口の壺で、外面には丁寧な縦方向のヘラミガキが認められる。53・54は小型の丸底壺である。内面にはいずれも左上がりのヘラケズリが認められる。55～58は底部片である。56には木の葉の圧痕が認められる。

59・62は鉢である。62は大型の鉢で、内外面に横方向のヘラミガキが認められる。

60・61は高壺である。60は脚部を壺部に押入することにより製作されており、壺部外面には縦方向のハケ目、脚部外面には縦方向のヘラミガキ、内面には横方向のケズリが認められる。

63は手焙形土器の破片である。接合部に低い突帯が巡る。外面にはヘラ描きの文様が認められる。

64は把手付きの壺と考えられるが、破片のため明らかでない。

表2 土器一覧表1（かっこ内は現存値）

報告 No	口 径	器 高	底 径 腹 径	種 類	器 種	層位	色 調
1	29.9	(14.9)	—	縄文土器	深鉢	上層	浅黄色
2	18.6	(4.05)	—	土師器	壺	上層	灰黄
3	13.2	(5.15)	—	土師器	壺	上層	にぶい黄褐
4	—	(4.3)	3.8	弥生土器	壺	上層	淡黄
5	—	(6.0)	—	製塙土器?	製塙土器?	上層	灰白
6	18.5	(6.8)	—	弥生土器	壺	上層	にぶい黄褐
7	—	(7.25)	—	弥生土器	壺	上層	黄灰
8	—	(10.65)	—	土師器	壺	上層	にぶい黄褐
9	15.1	(11.55)	—	土師器	高坏	上層	にぶい黄褐
10	—	(8.10)	—	土師器	高坏	上層	灰白
11	13.6	4.4	—	須恵器	坏蓋	上層	灰白
12	15.5	5.0	—	須恵器	坏蓋	上層	灰
13	15.0	4.5	—	須恵器	坏身	上層	灰
14	—	(9.1)	6.0	須恵器	壺	上層	灰
15	—	(4.45)	—	須恵器	高坏	上層	灰白
16	21.9	(8.9)	—	須恵器	壺	上層	灰
17	18.2	(6.2)	—	須恵器	壺	上層	赤褐
18	15.1	2.3	—	土師器	杯	上層	橙
19	18.1	(6.80)	—	土師器	壺	中層	にぶい黄褐
20	16.4	(6.95)	—	土師器	壺	中層	にぶい褐
21	15.4	(4.6)	—	土師器	壺	中層	にぶい黄褐
22	15.6	(29.25)	—	土師器	壺	中層	にぶい黄褐
23	17.1	(5.0)	—	土師器	壺	中層	浅黄橙
24	15.95	(2.95)	—	弥生土器	壺	中層	浅黄
25	—	(4.85)	4.9	弥生土器	壺	中層	灰黄
26	11.9	(6.8)	—	土師器	壺	中層	にぶい黄褐
27	7.45	(8.0)	8.5	土師器	壺	中層	明黄褐
28	—	(6.55)	—	土師器	高坏	中層	にぶい黄
29	15.6	10.90	11.15	土師器	高坏	中層	にぶい黄褐
30	15.4	(9.7)	—	土師器	高坏	中層	にぶい黄褐
31	—	(5.7)	—	土師器	高坏	中層	橙
32	—	(6.65)	—	土師器	高坏	中層	にぶい橙

表3 土器一覧表2 (かっこ内は現存値)

報告 №	口 径	器 高	底 径 腹 径	種 類	器 種	層位	色 調
33	—	(7.9)	—	弥生土器	高環	中層	灰白
34	—	(4.6)	—	弥生土器	高環	中層	浅黄橙
35	—	(3.9)	—	弥生土器	高環	中層	淡黄
36	20.5	(2.55)	—	弥生土器	器台	中層	浅黄
37	13.2	(11.8)	—	弥生土器	甕	下層	にぶい黄橙
38	17.2	(4.9)	—	弥生土器	甕	下層	にぶい黄褐
39	17.4	(1.9)	—	弥生土器	甕	下層	淡黄
40	—	(4.9)	5.4	弥生土器	甕	下層	淡黄
41	—	(4.95)	4.8	弥生土器	甕	下層	にぶい黄
42	—	(4.8)	4.4	弥生土器	甕	下層	にぶい黄
43	—	(4.7)	—	弥生土器	甕	下層	にぶい黄橙
44	—	(4.4)	—	弥生土器	底部(鍵孔土器?)	下層	浅黄
45	—	(5.2)	—	弥生土器	底部	下層	灰白
46	15.1	(6.5)	—	弥生土器	壺	下層	灰白
47	19.8	(4.25)	—	弥生土器	壺	下層	明黄褐
48	14.05	(4.1)	—	弥生土器	壺	下層	灰白
49	21.5	(2.0)	—	弥生土器	壺	下層	橙
50	18.95	(2.2)	—	弥生土器	壺	下層	黄灰
51	17.1	(7.95)	—	弥生土器	壺	下層	にぶい褐
52	11.85	(7.05)	—	弥生土器	壺	下層	にぶい黄
53	12.95	(11.75)	—	土師器	壺	下層	灰黄褐
54	13.85	(9.8)	—	土師器	壺	下層	にぶい黄橙
55	—	(7.35)	4.7	弥生土器	壺	下層	灰白
56	—	(7.2)	6.1	弥生土器	壺	下層	灰白
57	—	(3.45)	3.5	弥生土器	壺	下層	灰白
58	—	(3.3)	5.3	弥生土器	壺	下層	にぶい黄橙
59	19.45	9.8	2.6	弥生土器	鉢	下層	にぶい黄褐
60	—	(11.25)	—	弥生土器	高環	下層	灰白
61	—	(8.5)	—	弥生土器	高環	下層	淡黄
62	25.75	(5.75)	—	弥生土器	鉢	下層	淡黄
63	15.2	(3.3)	—	弥生土器	手培形土器	下層	灰黄
64	—	(9.2)	—	弥生土器	壺	下層	浅黄

第4章　まとめ

1. 調査区は微高地の北西端に位置する。
2. 調査は県営西宮北口（2期）住宅建設に伴うもので、復興調査として位置づけられた。
3. 遺跡を確認した時は工事が進行していたため、微高地縁辺部の弥生時代から古墳時代の調査のみを行うことができた。
4. 造構は、時期不明の大小の杭列と、土器溜まりが確認された。
5. 土器は上中下の3層から出土した。
6. 上層からは須恵器・土師器・弥生土器・縄文土器が出土し、古墳時代の後期に堆積した層と考えられる。ただし、土器の18は古代まで下がる可能性がある。
7. 中層からは土師器・弥生土器が出土し、古墳時代に堆積した層と考えられる。
8. 下層からは土師器・弥生土器が出土したが、中層に比べて弥生土器の占める割合が多い。弥生時代から古墳時代に堆積した層と考えられる。
9. 今回の調査によってこれまで知られなかった遺跡の一部が明らかとなった。
10. 調査区の南東、および南側で行われた調査では、古墳時代の掘立柱建物、堅穴式住居などが見つかっており、遺跡の中心と考えられている（高畠町遺跡（Ⅱ）（Ⅲ））。
11. 県営西宮北口（1期）住宅建設では、今回の調査区のすぐ北側を調査しているが、そこでは旧河道が検出されたのみで、遺跡は確認されていない。よって、高畠町遺跡は今回の調査区を北限として、南側を中心に広がる遺跡であると考えられる。



写真2　遺跡の現状（平成9年撮影）

写 真 図 版



遺跡の環境（1949年撮影）



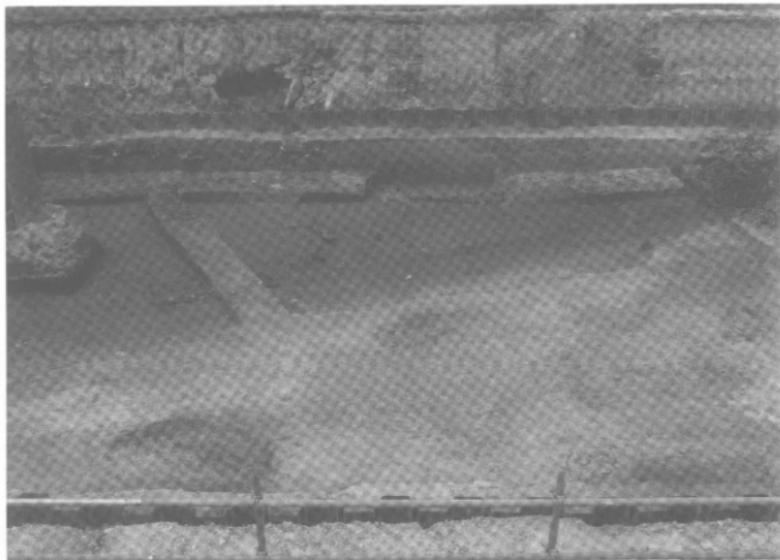
1. 調査区遠景〔南西から〕



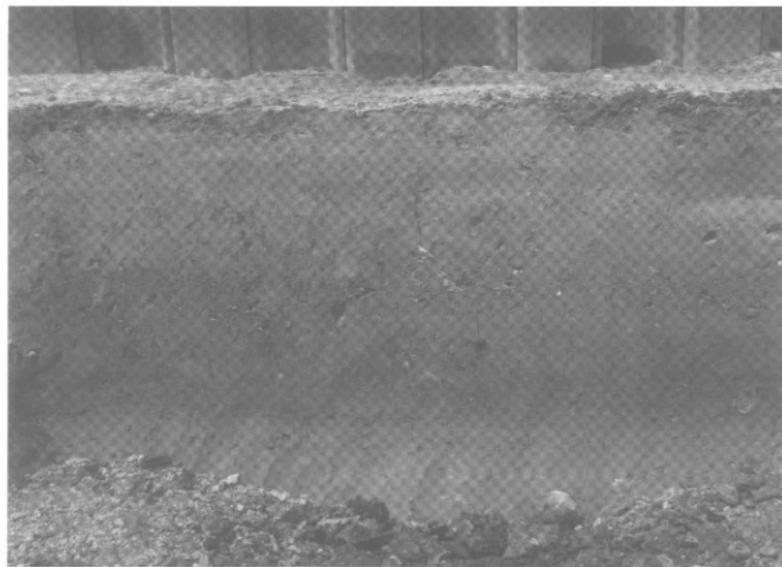
2. 調査前〔西から〕



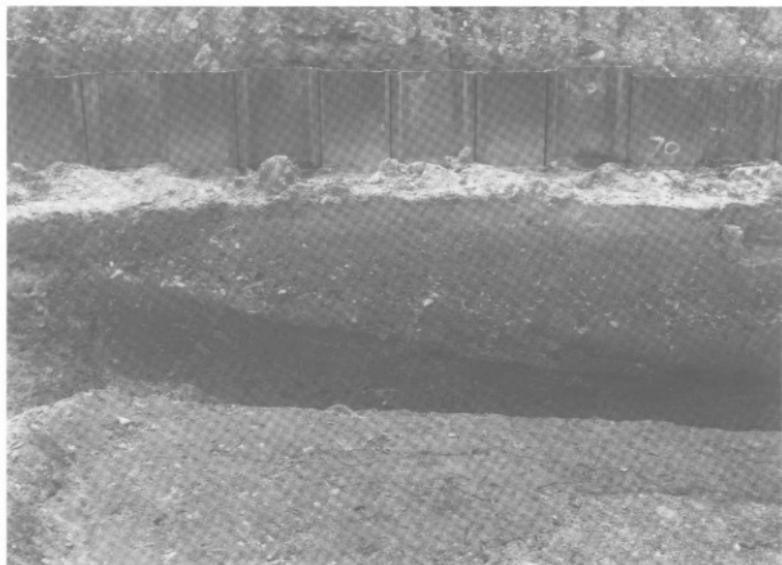
1. 調査区全景 [東から]



2. 調査区全景 [南から]



1. 基本層序〔西壁北側〕



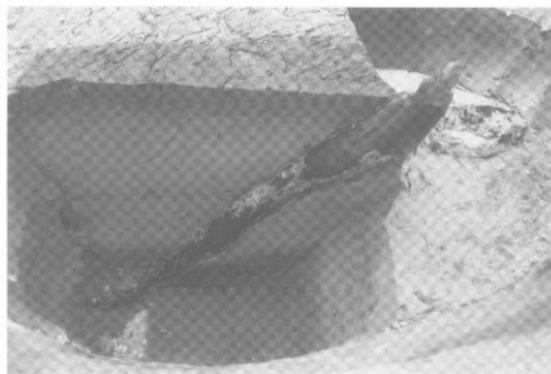
2. 基本層序〔西壁南側〕



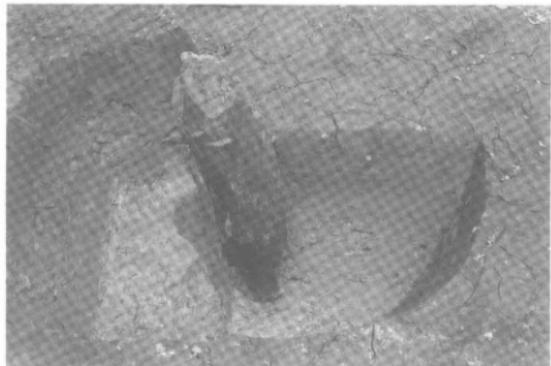
1. 落ち込み内遺物出土状況〔南から〕



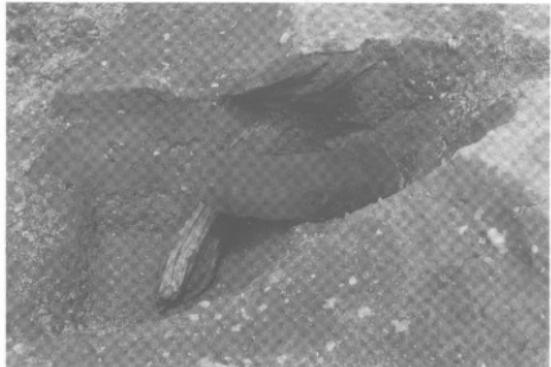
2. 落ち込み内遺物出土状況〔北から〕



1. 杭 1 断ち割り状況〔南東から〕



2. 杭 2 断ち割り状況〔西から〕



3. 杭 3 断ち割り状況〔南西から〕

写真図版 7
遺物(1)
(上層出土遺物)



8



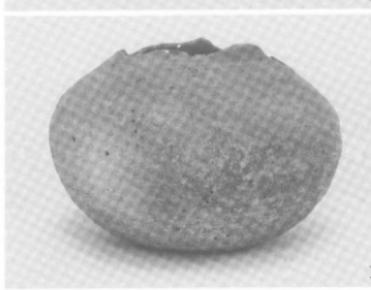
9



11



12



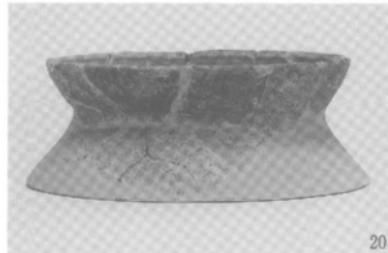
14



17



4





37



41



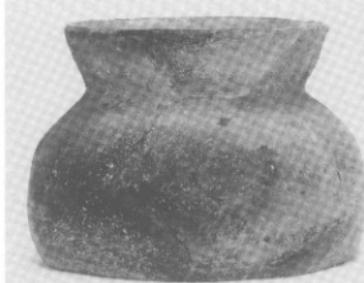
42



46



43



53



44



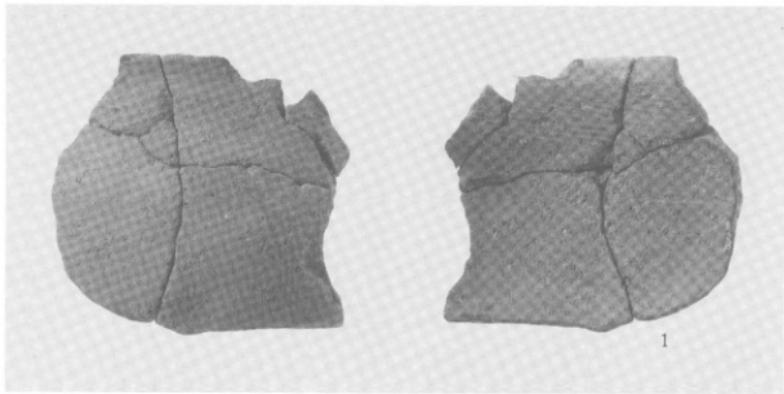
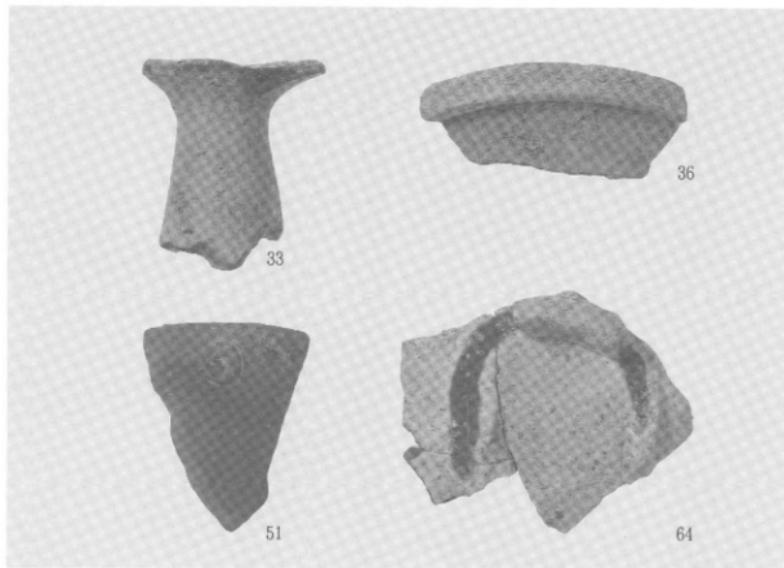
57



59



58



報告書抄録

ふりがな	たかはたちょういせき							
書名	高畠町遺跡(1)							
副書名	県営西宮北口(2期)住宅建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
卷次								
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告							
シリーズ番号	第187冊							
編著者名	中村 弘							
編集機関	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所							
所在地	〒652 神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号 TEL078-531-7011							
発行年月日	西暦1999(平成11)年3月31日							
所 收 遺 跡 名	所 在 地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	調査番号					
たかはたちょう 高畠町	ひょうじりん にしのみやし 兵庫県西宮市 たかはたちょう 高畠町20-12			34° 44' 17"	135° 21' 51"	全面調査	300m ²	県営西宮北 口(2期) 住宅建設事 業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
高 畠 町	集落跡	弥生後期 古墳前期	土器溜まり 杭	弥生土器 土師器				

兵庫県文化財調査報告 第187冊

高畠町遺跡（Ⅰ）

— 塚宮西宮北口（2期）住宅建設事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書 —

平成11年3月31日発行

編集 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

〒652 神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号

TEL 078-531-7011

発行 兵庫県教育委員会

〒650 神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

印刷 株式会社 精文舎
